

## 複合動詞の自・他対応について

——派生に基づく対応を中心に——

朱 春日\*

キーワード：複合動詞，自・他対応，派生，物理的意味，実質的意味

### 要 旨

日本語の語彙的複合動詞の組み合わせは、他動性調和の原則、主語一致の原則などにより制約されているが、語彙的複合動詞の中には、このような諸制約から外れた不規則な組み合わせの複合動詞が存在する（例：打ち上がる、舞い上げる）。これらの不規則な複合動詞は、自・他対応する複合動詞から派生されたと指摘されているものの、具体的にどのような場合に派生されやすいのかについては考察されていない。本稿では、主に「上げる」「上がる」を後項とする語彙的複合動詞を取り上げ、「他動詞+非対格自動詞」と「非対格自動詞+他動詞」型の不規則な複合動詞が派生されやすい場合と派生されにくい場合について探った。その結果、「他動詞+非対格自動詞」型の不規則な複合動詞が派生されやすいのは、①後項動詞が実質的な意味を持つか持たないかに関わらず、前項動詞が実質的な意味を持たない場合と②前項が抽象的な意味を、後項が実質的な意味を持つ場合で、派生されにくいのは、①後項動詞が実質的な意味を持つか持たないかに関わらず、前項動詞が物理的な意味を表す場合と②前項が抽象的な意味を、後項が実質的な意味を持たない場合であることが分かった。「非対格自動詞+他動詞」型の複合動詞の派生においては、「他動詞+非対格自動詞」型の複合動詞に比べ、その数が限られており、「自動詞+自動詞」型の複合動詞と自・他対応しているのも少ないことが明らかとなった。

### 1. はじめに

日本語の動詞には、「倒す/倒れる」「上げる/上がる」のように、自動詞と他動詞がペアを持つものが多い。これらの自・他のペアを持つ動詞は他の動詞と組み合わせると複合動詞になると、次のように対応する複合動詞を持ったり持たなかったりする。

- (1) a. 花火を打ち上げる。
- b. 花火が打ち上がる。

---

\*ZHU Chunri：中国吉林省通化師範学院教員

- (2) a. 埃を舞い上げる。  
b. 埃が舞い上がる。
- (3) a. 太郎が木を切り倒す。  
b. \*木が切り倒れる。
- (4) a. \*木の葉を舞い落とす。  
b. 木の葉が舞い落ちる。

語彙的複合動詞はすべての動詞が自由に組み合わせられるのではなく、それは他動性調和の原則（影山 1993）、主語一致の原則（松本 1998）などにより制約されている。従来の研究では、対応する動詞を持つ「打ち上がる」のような「他動詞+非対格自動詞<sup>1</sup>」型の複合動詞（以下、「他+非対格自」型の複合動詞と呼ぶ）、また「舞い上げる」のような「非対格自動詞+他動詞」型の複合動詞（以下、「非対格自+他」型の複合動詞と呼ぶ）は、複合動詞の組み合わせの原則から外れた不規則な動詞とされ、これらに対応する複合動詞から派生されたものと指摘されている（西尾 1982、須賀 1984、石井 1987、影山 1993・1999、松本 1998）。しかし、どのような場合に派生されやすく、またどのような場合に派生されにくいかについては明らかにされていない。本稿では、主に「上げる」「上がる」を後項とする語彙的複合動詞を取り上げ、この点について明らかにすることを目的とする。

## 2. 先行研究

### 2-1. 複合動詞の組み合わせについての先行研究

影山（1993）は、複合動詞を統語的複合動詞と語彙的複合動詞に分け、語彙的複合動詞は他動詞か非能格自動詞<sup>2</sup>同士、或いは非対格自動詞同士によって作られるとしている。本稿の考察対象である「他+非対格自」と「非対格自+他」型の複合動詞は影山の複合動詞の組み合わせの原則から外れた動詞である。

松本（1998）は、日本語の語彙的複合動詞の組み合わせは、動詞の意味構造における諸制約と、主語一致の原則<sup>3</sup>によって制約されているとし、「打ち上がる」「積み上がる」のような、主語不一致型の複合自動詞は、対応する複合他動詞形が存在する場合のみ許されるとしている。

しかし、複合他動詞が存在するからといって必ずしも複合自動詞が派生されるのではなく（例えば、複合他動詞「抱き上げる」「切り倒す」からは「\*抱き上がる」「\*切り倒れる」が派生されていない）、どのような複合動詞が派生されやすいのかについて考察する必要がある。

<sup>1</sup> 非意図的な行為を表す自動詞が非対格自動詞である。（詳しくは影山 1993 を参照）

<sup>2</sup> 意図的に動作を行う動作主を主語に取る自動詞である。（詳しくは影山 1993 を参照）

<sup>3</sup> 主語一致の原則とは、通例、二つの動詞の主語として実現する項が同一物を指すというものである（松本 1998 : 52）。

## 2-2. 複合動詞の自・他対応についての先行研究

西尾（1982）は、複合動詞の自・他対応の場合、「折り曲げる/折り曲がる」「切り替える/切り替わる」のように複合動詞の前要素は他動性の形のまま残るものが多いとし、それは、これらが二語の連合ではなくて、一個の複合動詞である以上、前項動詞の自・他性を取り立てて問題とすることのほうが、不自然であるとしている。

須賀（1984）は、自動詞形と他動詞形（形態的に対応する自動詞と他動詞）とが構文論的な「対応」を示すとき、複合動詞が一語として機能し得る場合は派生を促進するとし、派生は複合動詞の一語化の証であると述べている。

西尾（1982）と須賀（1984）は、複合他動詞からの自動詞化は複合動詞が一個の動詞であるからであると述べているが、影山（1993）には、語彙的複合動詞は動詞と動詞の間に助詞の介入を許さず（例：「\*抱きも上がる」）、いずれも結びつきの緊密な一個の動詞であると述べてある。複合動詞はいずれも一個の動詞であるが、複合動詞の中には不規則な複合動詞に派生されないものもあり、複合動詞の派生は複合動詞の「一語化」の証であるという説明では足りない。

## 3. 複合動詞の分類

本稿では、斎藤（1989）の複合動詞の分類を考察の出発点とする。斎藤（1989）は、V1（前項動詞）、V2（後項動詞）が実質的な意味を保持しているかどうかという観点から、複合動詞を次の四種類に分類している<sup>4</sup>。

- ① V1,V2 双方が実質的な意味を保持しているもの  
例：木を切り倒した→木を [○切っ/○倒し] た
- ② V1 のみが実質的な意味を保持しているもの  
例：本を読み返した→本を [○読ん/\*返し] た
- ③ V2 のみが実質的な意味を保持しているもの  
例：人を公平に取り扱う→人を公平に [\*取る/○扱う]
- ④ 意味的に V1, V2 に分解できないもの  
例：彼女は落ち着かなかった→彼女は [\*落ち/\*着か] なかった

（斎藤 1989：63～64）

本稿は、斎藤（1989）と同じく、動詞が同じ文脈において単独で使われる場合を実質的な意味

<sup>4</sup> この複合動詞の分類の方法は、「山本（1984）で提出されたものに基づいているが、もともとは複合動詞の格支配と構成要素の格支配との相互関係から複合動詞を分類するために編み出されたものである。（斎藤 1989：64）」本稿では、「実質的な意味を保持している」か否かを基準とするため、斎藤（1989）に従う。

を持つと見なし、単独で使えない場合を実質的な意味を持たないと見なす。なお、複合動詞の4分類については、それぞれ構造①、②、③、④と呼ぶ。

#### 4. 「他+非対格自」型の複合動詞の派生

##### 4-1. 考察対象

姫野（1999）の複合動詞リストに出現する「他動詞+上げる」型の複合動詞<sup>5</sup>を考察対象とする。複合動詞の自・他対応は、「折れ曲がる/折り曲げる」や「はまり込む/はめ込む」のように前項・後項共に形態的な対応を示す場合、後項動詞が一致し、前項動詞が自・他対応を示す場合もあるが、本稿では派生に基づく対応について述べることを目的とするために、前項動詞の形態が一致していながら、自・他対応する場合のみについて考察する。考察対象とした「他動詞+上げる」型の複合動詞については、その対応する「他動詞+上がる」があるかどうかをWWWページで検索した。以下、その結果を対応するものと対応しないものに分け、表1に示す。

表1 「他動詞+上げる」と「他動詞+上がる」の自・他対応

対 応	打ち上げる/打ち上がる, 押し上げる/押し上がる, 切り上げる/切り上がる, 繰り上げる/繰り上がる, 積み上げる/積み上がる, 引き上げる/引き上がる, 巻き上げる/巻き上がる, 盛り上げる/盛り上がる…
不対応	追い上げる/*追い上がる, 折り上げる/*折り上がる, 刈り上げる/*刈り上がる, 吸い上げる/*吸い上がる, 抱き上げる/*抱き上がる, 畳み上げる/*畳み上がる, 釣り上げる/*釣り上がる, 撫で上げる/*撫で上がる, 挟み上げる/*挟み上がる, 振り上げる/*振り上がる, 放り上げる/*放り上がる, 見上げる/*見上がる……

##### 4-2. 「他動詞+上げる」と「他動詞+上がる」の自・他対応

3. の斎藤（1989）の複合動詞についての分類を考察の出発点とし、複合動詞の構造と複合動詞の自・他対応とは如何なる関わりがあるか見てみる。

- (5) a. ボールを放り上げる.  
b. \*ボールが放り上がる.
- (6) a. 子供を抱き上げる.  
b. \*子供が抱き上がる.

<sup>5</sup> 日本語の複合動詞は数多くあるが、本稿では不規則な複合動詞の派生の規則性を探ることを目的とするため、多くの動詞と結合し、且つその意味用法も広い「上げる」「上がる」を後項とする複合動詞を主な考察対象とする。なお、「上げる」は他動詞、自動詞とも結合するが、「他+他」型の複合動詞と「他+非対格自」型の複合動詞の対応について考察するため、「他動詞+上げる」型の複合動詞のみを考察対象とする。また、「～上げる」が統語的複合動詞になる場合は考察の対象外とする。計145個である。

- (7) a. 空を見上げる。  
b. \*空が見上がる。
- (8) a. 羊を丘の上に追い上げる。  
b. \*羊が追い上がる。
- (9) a. 円を切り上げる。  
b. 円が切り上がる。
- (10) a. 普通預金の金利を引き上げる。  
b. 普通預金の金利が引き上がる。
- (11) a. 大会を盛り上げる。  
b. 大会が盛り上がる。
- (12) a. 予定を繰り上げる。  
b. 予定が繰り上がる。

このように、(5)～(8)の複合動詞は自・他対応しないのに対し、(9)～(12)の複合動詞は自・他対応している。複合動詞の構造を見ると、以下に示すように、(5)の「放り上げる」と(6)の「抱き上げる」は構造①、(7)の「見上げる」と(8)の「追い上げる」は構造②の複合動詞であることが分かる。

- (5a) ボールを放り上げる。→a. ボールを放る。b. ボールを上げる。……構造①
- (6a) 子供を抱き上げる。→a. 子供を抱く。b. 子供を上げる。……構造①
- (7a) 空を見上げる。→a. 空を見る。b. \*空を上げる。……構造②
- (8a) 羊を丘の上に追い上げる。→a. 羊を追う。b. \*羊を上げる。……構造②

次は、自・他対応する(9)～(12)の構造について見てみる。以下に示すように、(9a)の「切り上げる」と(10a)の「引き上げる」は構造③、(11a)の「盛り上げる」と(12a)の「繰り上げる」は構造④の複合動詞である。

- (9a) 円を切り上げる。→a. \*円を切る。b. 円(の価値)を上げる。……構造③
- (10a) 普通預金の金利を引き上げる。→  
a. \*普通預金の金利を引く。b. 普通預金の金利を上げる。……構造③
- (11a) 大会を盛り上げる。→a. \*大会を盛る。b. \*大会を上げる。……構造④
- (12a) 予定を繰り上げる。→a. \*予定を繰る。b. \*予定を上げる。……構造④

構造①と②はV1が実質的な意味を持ち、単独で複合動詞と同じ文脈で使いうる場合で、構造③と④はV1が実質的な意味を持たず、単独では複合動詞と同じ文脈で使えない場合である。不規則な複合動詞の派生は、V1が実質的な意味を持つか持たないかに関わりがあると言える。しかし、これは絶対的ではなく、次の例を見れば分かるように、V1が実質的な意味を持ちながらも、自・他対応する場合がある。

(13) a. 実績を積み上げる.

b. 実績が積み上がる.

(13a) 実績を積み上げる. → a. 実績を積む. b. 実績を上げる.

……構造①

(13a)の「積み上げる」は構造①でありながら、自・他対応を示し、単にV1が実質的な意味を持つか持たないかだけでは、不規則な複合動詞の派生について説明できないことが分かる。以下、対応する動詞を持つ複合動詞と、対応する動詞を持たない複合動詞を取り上げ、詳しく考察していく。

### 4.3. 「他+非対格自」型の複合動詞に派生されやすい複合動詞

#### 4.3.1. V1が実質的な意味を持っているか否か

上でも見たように、構造③と構造④の複合動詞は対応する動詞を持ち、それは、V1が実質的な意味を持たない場合であった。「切り上げる」と「切り上がる」、「繰り上げる」と「繰り上がる」、「積み上げる」と「積み上がる」の対応について具体的に考察することにより、それについて確かめる。先ず、「切り上げる」と「切り上がる」の対応について見る。

(14) a. 中国元を切り上げる.

b. 中国元が切り上がる.

(15) a. 仕事を早く切り上げる.

b. 早めに仕事が切り上がった.

(16) a. 必要数は小数点以下を切り上げる.

b. 小数点以下が切り上がる.

(14)～(16)はいずれも自・他対応しているが、V1が実質的な意味を持っているか否かについて見てみよう。

(14a) 中国元を切り上げる. → \*中国元を切る.

(15a) 仕事を早く切り上げる. → \*仕事を早く切る.

(16a) 必要数は小数点以下を切り上げる. → \*必要数は小数点以下を切る.

いずれも、V1の「切る」は実質的な意味を持たない。V1が実質的な意味を持たない場合に、自・他対応することは、「繰り上げる」と「繰り上がる」の対応においても窺える。

(17) a. 予定を繰り上げる.

b. 予定が繰り上がる. (=12)

(18) a. 開演を一時間繰り上げる.

b. 開演が一時間繰り上がる.

(17)(18)も自・他対応しているが、下に示したようにそのV1は実質的な意味を持たない。

(17a) 予定を繰り上げる. → \*予定を繰る.

(18a) 開演を一時間繰り上げる。→\*開演を一時間繰る。

以上の例において、V1が実質的な意味を持たない場合に「他+他」型の複合動詞と「他+非対格自」型の不規則な複合動詞が対応し、不規則な複合動詞が派生されやすいことが分かる。

前節にも見たように、V1が実質的な意味を持つ場合は、自・他対応する場合も、対応しない場合もある。

(19) a. 本を積み上げる。

b. \*本が積み上がる。

(20) a. 荷物を積み上げる。

b. \*荷物が積み上がる。

(21) a. 実績を積み上げる。

b. 実績が積み上がる。(=13)

(19)～(21)のように、「積み上げる」と「積み上がる」は対応する場合も、対応しない場合もあり、そのV1は下に示すようにいずれも実質的な意味を持っている。

(19a) 本を積み上げる。→本を積む。

(20a) 荷物を積み上げる。→荷物を積む。

(21a) 実績を積み上げる。→実績を積む。

V1が同じく実質的な意味を持っていながら、なぜ自・他対応する場合もあれば、自・他対応しない場合もあるのだろうか。そこには何かの違いがあるはずである。V1の「積む」と複合動詞「積み上げる」の意味用法について国語辞典(大辞林第2版)を調べて見た。

表2 動詞「積む」の意味用法

意 味	用 例
① 物の上に物を重ねる。	石を積んで塀を作る
② 乗り物に荷物をのせる。積載する。	貨車に石炭を積む
③ 長い期間をかけて、次第に増やしたり高めたりする。	経験を積む
④ (金品を)ためる。また、貯金する。	巨万の富を積む
⑤ 金銭を相手に渡すべく用意する。	保釈金を積んで保釈される
⑥ 「つもる(1)」に同じ。	雪が降り積む

表3 複合動詞「積み上げる」の意味用法

意 味	用 例
① 積み重ねて高くする。	荷物を積み上げる
② 積み終わる。つみきる。	一日で積み上げた
③ 少しずつおこなう。段階的に成し遂げる。	実績を着実に積み上げていく

「積む」の意味は複数あるが、大きく物理的な意味<sup>6</sup>（意味①②⑥）と抽象的な意味<sup>7</sup>（意味③④⑤）とに分けられる。複合動詞になってもその意味は、物理的な意味と（「積み上げる」の意味①②）、抽象的な意味（「積み上げる」の意味③）がある。（19a）（20a）の「積み上げる」においての「積む」は「物の上に物を重ねる」意味で、物理的な意味を表し、（21a）の「積み上げる」においての「積む」は「長い期間をかけて、次第に増やしたり高めたりする」という意味で抽象的な意味を表している。V1の表す意味に違いがあるのが分かる。自・他対応を示している（14）～（16）の「切り上げる/切り上がる」について見ても、その対象物はいずれも「中国元（の価値）」「仕事」など抽象的なもので、「切る」は「切断する」という具体的な行為、つまり物理的な意味を表していない。

これより、「他+非対格自」型の複合動詞の派生は、①V1が実質的な意味を持たない場合、②V1が実質的な意味を持っている場合は、物理的な意味ではなく、抽象的な意味を表す場合に派生されやすいという仮説が立てられる。

#### 4.3-2. 「積む」「切る」を前項とする複合動詞の自・他対応

4.3-1. で立てた仮説について検証するために、「積む」と「切る」を前項とする「～上げる」以外の複合動詞<sup>8</sup>について見てみる。

##### (22) 「積む」「切る」を前項とする複合動詞

自・他対応するもの：積み重ねる（積み重なる）、切り替える（切り替わる）

自・他対応しないもの：積み替える、積み出す、積み残す、切り落とす、切り下ろす、切り崩す、切り砕く、切り下げる、切り揃える、切り倒す、切り出す、切り付ける、切り広げる、切り回す、切り破る

(22)の複合動詞は、ほとんど対応する複合動詞を持たず、自・他対応のあるのは「積み重ねる」と「切り替える」だけで、その対応する「積み重なる」、「切り替わる」は両方辞書に載っており、かなり慣習的に定着している。国語辞典における「積み重ねる」/「積み重なる」と「切り替える」/「切り替わる」についての解釈は次の表4、5の通りである。

<sup>6</sup> 視覚的に捉えられるような、具体的な行為或いは動作を表す場合を、本稿では物理的な意味と称する。「石を積む」のように、動詞の対象物は「石」などのような具体的なもので、その行為も視覚的に捉えられる。

<sup>7</sup> 視覚的に捉えられないような、具体的な行為或いは動作を表さない場合を、本稿では抽象的な意味と称する。「経験を積む」のように、動詞の対象物は「経験」などのような抽象的なもので、その行為は視覚的に捉えられない。

<sup>8</sup> 広辞苑より「積む」「切る」を前項とし有対他動詞を後項とする語彙的複合動詞を抜き出した。



表4 複合動詞「積み重ねる」/「積み重なる」の意味用法

積み重ねる	積み重なる
① 上へ上へと重ねて高くする。 例：板を積み重ねる	① 上へ上へと物が重なって高くなる。 例：板が積み重なる
② 物事を何度も繰り返してふやす。 例：努力を積み重ねる	② 次々に物事が重なって大きくなる。 例：借金が積み重なる

表5 複合動詞「切り替える」/「切り替わる」の意味用法

切り替える	切り替わる
① 今までのものをやめて、別のものに替える。 例：考えを切り替える	今までとっていた方法・手段・制度などが別のものにかわる。 例：新方式に切り替わる
② 証文を書き替えて更新する。 例：証文を切り替える	

表4, 表5で明らかのように, この二ペアの複合動詞は構文的・意味的に対応している。「積み重ねる」の表す「物事を何度も繰り返してふやす」という意味と, 「積み重なる」の表す「次々に物事が重なって大きくなる」という意味は対応し, V1の「積む」の意味は抽象的なものである<sup>9</sup>。「切り替える」, 「切り替わる」も同じく構文的・意味的に対応し, そのV1の表す意味も「切断する」という物理的な意味を表さず, 抽象的な意味を表している。これに対し, 自・他対応する複合動詞を持たないものは, 次のようにV1が物理的な意味を表す場合である。

- (23) 貨物を積み出す。→貨物を積む。  
 (24) 下枝を切り落とす。→下枝を切る。  
 (25) 毛先を切り揃える。→毛先を切る。

これは仮説のとおりである。従って, 不規則な複合動詞が派生されやすいのは, 複合動詞のV1が実質的な意味を持たない場合, またV1が実質的な意味を持つ場合は, 物理的な意味ではなく, 抽象的な意味を表す場合であると言える。

#### 4-4. 「他+非対格自」型の複合動詞に派生されにくい複合動詞

##### 4-4-1. 前項動詞が物理的な意味を持っているか否か

本節では, 自・他対応する動詞を持たない「放り上げる」「抱き上げる」「追い上げる」を取り上げ, 更に考察し, 不規則な複合動詞の派生について探る。

<sup>9</sup> 「a. 板を積み重ねる/b. 板が積み重なる。」でのV1は, 物理的な意味を表しているが, 自・他対応している。「積む」は自動詞でもあり, 「積み重なる」における「積む」は筆者の調べた限りでは自動詞の可能性はある。すると, 「積み重なる」は「自+自」の組み合わせで, 不規則な複合動詞ではなくなる。

先ずは、「放り上げる」と「抱き上げる」の例について見てみよう。

- (26) a. ボールを放り上げる。  
 b. \*ボールが放り上がる。(=5)
- (27) a. 作業員がゴミ袋を収集車のホッパーに放り上げる。  
 b. \*ゴミ袋が放り上がる。
- (28) a. 子供を抱き上げる。  
 b. \*子供が抱き上がる。(=6)
- (29) a. 太郎君は大きな卵をそっと抱き上げてみた。  
 b. \*卵が抱き上がった。

上の(26a)～(29a)を見た場合、「放り上げる」、「抱き上げる」の対象はそれぞれ「ボール」、「ゴミ袋」、「子供」、「卵」のように具体的な名詞になっており、V1 はいずれも物理的な意味を表している。V1 が物理的な意味ではなく、抽象的な意味を表す場合はどうであろうか。下に示すように、V1 が抽象的な意味を持っていても、必ずしも対応する複合動詞を持つわけではない。

- (30) a. 羊を丘の上に追い上げる。  
 b. \*羊が追い上がる。(=8)
- (31) a. グーグル利用者がヤフーを追い上げる。  
 b. \*ヤフーが追い上がる。
- (32) a. 中国企業が多国籍企業を追い上げる長い道のりにおいて、資金面からの有効サポートが必要である。(http://www.rieti.go.jp/users/china-tr/jp/030526sangyokigy...-16k)  
 b. \*多国籍企業が追い上がる。

(30)～(32)のV1は下のように、いずれも実質的な意味を持っている。

- (30a) 羊を丘の上を追い上げる。→羊を追う。(=8a)
- (31a) グーグル利用者が31%増とヤフーを追い上げる。→グーグル利用者がヤフーを追う。
- (32a) 中国企業が多国籍企業を追い上げる…→中国企業が多国籍企業を追う。

次いで、その意味が物理的な意味を表しているのか、抽象的な意味を表しているのかについて見てみる。国語辞典での「追い上げる」の意味についての記述は次のとおりである。

表6 複合動詞「追い上げる」の意味用法

意 味	用 例
① 追って上の方へ行かせる。	羊を丘の上に追い上げる。
② 先行するものを追って間隔を縮める。	先頭にいま一步というところまで追い上げた。

(30a)～(32a)を見た場合、(30a)でのV1の「追う」は、意味①で物理的な意味を表し、例(31a)

と(32a)においての前項「追う」は、意味②で抽象的な意味を表している。前節でも見たように、「積み上げる」は、V1が抽象的な意味を表している場合に対応する自動詞を持っている。しかし、「追い上げる」は「追う」の意味が抽象的な意味を表しているにも関わらず対応する自動詞を持たない。複合動詞のV1が抽象的な意味を表していながら、対応する自動詞を持たないのは、V1が物理的な意味を持つか抽象的な意味を持つかという違いの他に、別に原因があるように思われる。その原因については、V2が実質的な意味を持っているかどうかについて考察することにより探る。

#### 4-4-2. 後項動詞が実質的な意味を持っているか否か

対応する複合動詞を持つ「積み上げる」、「切り上げる」のV2が実質的な意味を持つか持たないかについて見てみる。

(14a) 中国元を切り上げる→中国元を上げる。

(15a) 仕事を早く切り上げる。→仕事を早く上げる。

(16a) 必要数は小数点以下を切り上げる。→必要数は小数点以下を上げる。

(21a) 実績を積み上げる。→実績を上げる。

上の例(14a)(15a)(16a)(21a)は全て対応する自動詞を持つ場合であるが、上に示したようにV2はいずれも実質的な意味を持っていて、単独で使う。対応する複合動詞を持たない「追い上げる」は、下に示すようにV2は単独で使うことが出来ず、実質的な意味を持たない。

(30a) 羊を丘の上に追い上げる。→\*羊を上げる。

(31a) グーグル利用者がヤフーを追い上げる→\*グーグル利用者がヤフーを上げる。

(32a) 中国企業が多国籍企業を追い上げる…→\*中国企業が多国籍企業を上げる。

#### 4-5. 結 論

以上、「他+他」型の複合動詞と「他+非対格自」型の複合動詞の自・他対応について考察し、如何なる場合に不規則な複合動詞に派生されやすいのか、又如何なる場合に派生されにくいのかについて分析したが、その結論は、次のとおりである。

- 1) 不規則な複合動詞が派生されやすいのは、①複合動詞のV2が実質的な意味を持つか持たないか関わらず、V1が実質的な意味を持たない場合、②V1が抽象的な意味を持ち、V2が実質的な意味を持つ場合である。
- 2) 不規則な複合動詞が派生されにくいのは、①複合動詞のV2が実質的な意味を持つか持たないか関わらず、V1が物理的な意味を持つ場合、②V1が抽象的な意味を持ち、V2が実質的な意味を持たない場合である。

## 5. 「非対格自+他」型の複合動詞の派生

### 5-1. 考察対象

「非対格自+他」型の複合動詞の派生についても、4節と同じように姫野（1999）の複合動詞リストに出現する「自動詞+上がる」型の複合動詞<sup>10</sup>を考察対象とする。考察対象とした「自動詞+上がる」型の複合動詞については、その対応する「非対格自動詞+上げる」があるかどうかをWWWページで検索した。その結果を対応するものと対応しないものに分け、表7に示す。

表7 「自動詞+上がる」と「自動詞+上げる」の形態的対応

対 応	乗り上がる/乗り上げる, 吹き上がる/吹き上げる, 舞い上がる/舞い上げる, 立ち上がる/立ち上げる
不対応	浮き上がる/*浮き上げる, 起き上がる/*起き上げる, 踊り上がる/*踊り上げる, 駆け上がる/*駆け上げる, 切れ上がる/*切れ上げる, 腫れ上がる/*腫れ上げる, 折れ上がる/*折れ上げる, 伸び上がる/*伸び上げる, 跳ね上がる/*跳ね上げる…

### 5-2. 「自動詞+上がる」と「自動詞+上げる」の自・他対応

表7から分かるように、「自+上がる」と「自+上げる」は形態的に対応しているものが4組しかない。この4組の複合動詞が構文的・意味的に対応するかどうかを見てみたい。

#### 5-2-1. 「乗り上がる」と「乗り上げる」

先ず、「乗り上げる」と「乗り上がる」について見てみよう。

- (33) a. 一人ひとりに声をかける小林さんの背中に、男の子が乗り上がった。  
(<http://www.niigata-nippo.co.jp/toki/sasae/camera1.html-5k->)  
b. \*男の子を乗り上げた。
- (34) a. また、編成列車の衝突時に、中間連結部における一方の車端部の車体台枠が他方の車体台枠に乗り上がることを想定して、台枠より上部のみを圧縮する試験を行いました。  
([http://www.rtri.or.jp/rd/openpublic/seika/2005/01/safety\\_](http://www.rtri.or.jp/rd/openpublic/seika/2005/01/safety_))  
b. \*中間連結部における一方の車端部の車体台枠を他方の車体台枠に乗り上げる…
- (35) a. 船が暗礁に乗り上がる。  
b. \*船を暗礁に乗り上げる。

<sup>10</sup>「上がる」は他動詞、自動詞とも結合するが、「自+自」型の複合動詞と「非対格自+他」型の複合動詞の対応について考察するため、「自動詞+上がる」型の複合動詞のみを考察対象とする。また、「～上がる」が統語的複合動詞になる場合は考察の対象外とする。計55個である。

(33)～(35)から明らかのように、「乗る上がる」と「乗る上げる」は自・他対応を示していない。従って、この二つの複合動詞は派生関係ではなく、別々の動詞として存在している可能性が高い。「乗る上がる」は「自+自=自」構造で、複合動詞の組み合わせの原則に合っているから別として、「乗る上げる」の構造はどうであろうか。工藤(2005)は、「乗る上げる」の「乗る」は自動詞ではなく、他動詞であると主張し、次のように述べている。

(前略)『古今著聞集』に「雲文といふあがり馬を乗られけるに」、『日葡辞書』に「ヨウ船ヲ乗ル人」の用例がある。これからわかるように、単に乗り物にのるだけの場合と、自ら乗り物を操る場合とで格支配が異なったのである。先にあげた「乗る」を前項とする複合動詞(「乗るあげる」「乗る回す」など)は一樣に、自ら操作する意の表現である。つまり、この「乗る」は他動詞と解釈してよいのである。(工藤 2005: 24)

本稿も工藤(2005)と同じく、「乗る上げる」においての「乗る」は他動詞だと考える。「乗る」が他動詞だとすれば、「乗る上げる」は「他+他」構造で、複合動詞の組み合わせの原則に合っている複合動詞になる。「乗る上がる」と「乗る上げる」は形態的に対応するだけで、構文的・意味的には対応せず、二つの複合動詞は派生関係にない。

#### 5-2-2. 「吹き上がる」と「吹き上げる」

「吹き上がる/吹き上げる」の前項の「吹く」は自・他両用動詞<sup>11</sup>である。「吹き上がる」, 「吹き上げる」においての「吹く」は自動詞なのか他動詞なのか、それぞれ、構文的・意味的に自・他対応しているかどうか考察してみる。

(36) 噴水が勢いよく吹き上がる。

(37) 水面(みなも)から吹き上がる風を受け、ゆらり、ゆらりと予想以上に大きく揺れる。

(<http://www.yomiuri.co.jp/tabidomestic/japan/20061002tb04.htm>)

(38) (前略) 下から湯が吹き上がる噴泉もあり、痔疾に効果があるという。

(<http://www.yomiuri.co.jp/tabidomestic/japan/20061002tb04.htm>)

(36)～(38)はいずれも次のように言い換えることができる。

(36)′ 噴水が勢いよく(上の方向に)吹く。

(37)′ 水面から(上の方向に)吹く風を受け、ゆらり、ゆらりと予想以上に大きく揺れる。

(38)′ 下から(上の方向に)湯が吹く噴泉もあり、痔疾に効果があるという。

「吹き上がる」は「吹く」に言い換えられ、「が」格を取るため、自動詞だと思われる。つまり、「吹き上がる」は「自+自」型の複合動詞である。

「吹き上げる」はどうであろうか。(39)～(41)を見てみよう。

<sup>11</sup> 「風が吹く(自)」, 「笛を吹く(他)」のように、「吹く」は自動詞としても、他動詞としても使われる。

- (39) 立春を目前にしても海から吹き上げる風は冷たい。

(<http://osaka.yomiuri.co.jp/flower/fl20205t.htm>)

- (40) (前略) 地表から水が吹き上げる「ボイリング」と呼ばれる現象だった。

(<http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/niigata/kikaku/071/1.htm>)

- (41) 潮風が吹き上げる道だけに潮に強い花でないともたない。

([http://mytown.asahi.com/kochi/news.php?k\\_id=40000150606060002](http://mytown.asahi.com/kochi/news.php?k_id=40000150606060002))

(39)～(41)の「吹き上げる」は次のように「吹く」に置き換えても非文にならない。

- (39)′ 立春を目前にしても海から(上の方向に)吹く風は冷たい。

- (40)′ 地表から水が(上の方向に)吹く「ボイリング」と呼ばれる現象だった。…

- (41)′ 潮風が(上の方向に)吹く道だけに潮に強い花でないともたない。

(39)～(41)のV1も自動詞であることが分かる。「吹き上げる」は「水が吹き上げる」「潮風が吹き上げる」のように、「が」格名詞句で表されている。「上げる」は他動詞だが、ここでは再帰的な性質<sup>12</sup>を帯びていることが考えられる。次は(42)(43)を見てみよう。

- (42) 名もない池でも、近頃では注意してみると定期的に気泡が浮く様や、底の砂を吹き上げる様子に気づく…… ([http://mytown.asahi.com/nagano/news.php?k\\_id=21000199999990254](http://mytown.asahi.com/nagano/news.php?k_id=21000199999990254))

- (43) 除雪車が突き進み、前面の回転刃で雪を吸い込み、細長いノズルで十数メートル吹き上げる。 (<http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/gunma/kikaku/041/2.htm>)

(42)(43)は他動詞構文をなしているが、それはまた、次のように言い換えられる。

- (42)′ 底の砂を(上の方向に)吹く。

- (43)′ 雪を(上の方向に)吹く。

(42)′(43)′から分かるように、「吹き上げる」における「吹く」は他動詞で、「吹き上げる」は「他+他」構造になる。「吹き上げる」が「他+他」構造の他動詞である場合は、次のように「吹き上がる」と自・他対応している。

- (44) (前略) 今なお約10分間隔で100度の熱湯を吹き上げており、足湯につかりながら自然の奇跡を楽しむことができる。……一気に10数mの高さまで熱湯が吹き上がる。

(<http://homepage2.nifty.com/kazn/kanketsusen.htm>)

- (45) (前略) 穴の中から熊の息が吹き上がってくるのが見えた。……その間ずっと熊は息を吹き上げていた。 (<http://www2.biglobe.ne.jp/~naxos/hida/hidahito042.htm-4k>)

以上のように、「吹き上げる」が「他+他」構造の場合は、「吹き上がる」と自・他対応を示

<sup>12</sup> 「再帰」とは、動作主から出た働きかけが結局は動作主自身に戻って来ることによって、動作が完結するという現象を言う(仁田1982:80)。李(2002)では、「風が吹き上げてきた。」において、複合動詞が「を」格を取らず、「が」格を取るの、他動詞が典型的な他動詞ではなく、再帰性を帯びているからだと述べている。

し、「自+他」構造の場合は、再帰的な性質を帯びる他動詞で、「吹き上がる」と対応していない。「吹き上がる」と「吹き上げる」の対応は「自+自」と「自+他」の対応ではないので、「吹き上がる/吹き上げる」も「乗り上げる/乗り上がる」と同じように、派生関係ではないと思われる。

### 5-2-3. 「舞い上がる」と「舞い上げる」

「舞い上がる」と「舞い上げる」は次のように自・他対応を示している。

- (46) 掃除するときホコリを舞い上げない裏技……そして、普通にホウキで掃除をするのです。ホコリは湿ったお茶殻にくっついて舞い上がりません。  
(<http://lucky.web.infoseek.co.jp/nichijo1.html-36k->)
- (47) 強力に花粉を吸い取るサイクロンタイプや、花粉を舞い上げない排気循環タイプを選びましょう。加湿器・吸入器。適度な湿度で、花粉が舞い上がりにくい環境を作ります。  
(<http://joshinweb.jp/kaden/kafun.html?ACK=TOKU-19k>)
- (48) 親子で袖風を舞い上げます。……風がうまく揚がるか心配されましたが、大風チャレンジも含めそれぞれの風は見事に舞い上がりました。  
(<http://www.town.uchinada.lg.jp/webapps/www/info/detail.js...>)

影山(1993)、松本(1998)は、「舞い上げる」は「舞い上がる」からの逆形成だと述べている。「他+他」構造から派生された「他+非対格自」型の複合動詞のように、「舞い上げる」はその対応する「舞い上がる」より派生された可能性がある。この派生は、一般的な現象なのだろうか。「舞う」を前項とするほかの複合動詞について見てみよう。「舞う」を前項とする複合動詞には「舞い落ちる」「舞い降りる」などがあるが、いずれも下のように自・他対応していない。

- (49) a. 時折吹く秋風に、葉がひらひらと舞い落ちる光景が見られた。  
([http://hokuriku.yomiuri.co.jp/hoksub5/winter/ho\\_s5\\_04111101.htm](http://hokuriku.yomiuri.co.jp/hoksub5/winter/ho_s5_04111101.htm))  
b. \*葉を舞い落とす。
- (50) a. 鶴が舞い降りる。  
b. \*鶴を舞い降ろす。

上のように「舞う」を前項とする「舞い落ちる」「舞い降りる」には対応する複合動詞がなく、「舞い上がる」と「舞い上げる」だけが自・他対応していることになる。「自+自」型の複合動詞と「自+他」型の複合動詞の対応は個別的な現象の可能性が高い。

### 5-2-4. 「立ち上がる」と「立ち上げる」

「立ち上がる」「立ち上げる」についての言及はいろいろある。国立国語研究所(2000)によると、「立ち上げる」は「コンピューターが立ち上がる」に始まり、のちに他動詞を作り出したら

しい。「立ち上げる」の由来はともかく、今や「立ち上げる」は辞書にまで載っているような違和感を覚えることなく使える語<sup>13</sup>になっている。この「立ち上げる」と「立ち上がる」とはいったいどのような関係にあるのだろうか。以下、見てみよう。

- (51) a. 彼は座席から立ち上がった。  
 b. \*彼を座席から立ち上げた。  
 c. 彼を座席から立ち上がらせた。
- (52) a. 彼は失敗から立ち上がった。  
 b. \*彼を失敗から立ち上げた。  
 c. 彼を失敗から立ち上がらせた。
- (53) a. コンピューターが立ち上がる。  
 b. 彼はコンピューターを立ち上げる。  
 c. \*彼はコンピューターを立ち上がらせる。
- (54) a. 新しい会社が立ち上がった。  
 b. 彼は新しい会社を立ち上げた。  
 c. \*彼は新しい会社を立ち上がらせた。

(51)と(52)は「立つ」が意図的行為を表す場合であるが、見て分かるように「立ち上げる」と対応せず、「立ち上がる」の使役態で表現される。これに対し、(53)(54)では、「立つ」が非意図的行為を表す場合、その使役態は使えず、「立ち上げる」で他動詞文を成しているのである。これは、またV1が意図的行為を表す場合は対応する複合動詞に派生されにくいことを意味する。

V1が意図的な行為を表す場合に複合動詞が対応しうるかどうか、「起き上がる」「躍り上がる」を例に見てみる。

- (55) a. 患者が起き上がる。  
 b. \*看護婦は患者を起き上げる。  
 c. 看護婦は患者を起き上がらせる。
- (56) a. 赤ちゃんの無事の誕生に家族は躍り上がった。  
 b. \*赤ちゃんの無事の誕生が家族を踊り上げた。  
 c. 赤ちゃんの無事の誕生が家族を躍り上がらせた。

(55)(56)から分かるとおおり、V1が意図的な行為を表す場合は、自・他対応せず、その使役態で他動詞文を表しているのである。これは、「舞い上がる/舞い上げる」の対応のあり方においても窺える。

- (57) a. 埃が舞い上がる。

<sup>13</sup> 広辞苑（第5版）における「立ち上げる」の意味：コンピューターのシステムを稼働できる状態にする。



- b. 埃を舞い上げる。  
 (58) a. 鳥が舞い上がる。  
 b. \*鳥を舞い上げる。

(57)において、「舞い上がる」と「舞い上げる」は構文的・意味的に対応しているが、これも前項の「舞う」が非意図的な行為を表す場合で、(58)のようにV1が意図的な行為を表す場合は、対応していない。

### 5-3. 「上がる」を後項としない複合動詞の自・他対応

「上がる」を後項とする複合動詞の自・他対応において、V1が意図的な行為を表す場合は対応する複合動詞を持たず、対応する複合動詞を持つ場合は、そのV1は非意図的な行為を表す場合に限ることが分かったが、これが一般的な現象かどうかについて見てみるために、「上がる」を後項としないいくつかの複合動詞について考察する。

松本(1998)には主語一致の原則に合わない複合動詞として、「飛び散らす」、「滑り落とす」、「転がり落とす」などが挙げられている。これらはいずれも「飛び散る」「すべり落ちる」「転がり落ちる」などの自動詞形がある。

- (59) 結核の患者さんが咳をした時に一緒に飛び散らした結核菌を含んだしぶきを周囲の人が吸い込むことによって感染します。乾燥に強いので、患者さんがその場を立ち去った後も空中に飛び散った結核菌が生きていて、感染源になり得ます。

(<http://www.t-pec.co.jp/news/1999news/9908-81.htm-11k>)

- (60) 表面が粗く摩擦の大きな材料は、屋根形状をいくら急勾配にしても、落葉を滑り落とすことは不可能。……一方、滑りやすい材料を使用した場合、極端な急勾配(斜度のきつい三角屋根など)にしなくても、落葉や雪はスムーズに滑り落ちる。

(<http://www.mitsuinomori.co.jp/kentiku/shintiku/planning/k...>)

- (61) 縦方向の振動を与えた傾斜した試料ト。レーの上に、食品原料を回動させながら連続的に転がり落とす。同時。160.300。に、試料が転がり落ちる時に、試料の表面にエネルギーが…… (<http://www.nfri.affrc.go.jp/patent/pdf/k-302.pdf>)

(59)～(61)はいずれも自・他対応を示す文であるが、見て分かるように、それはいずれもV1が非意図的な行為を表す場合である。これから、「自+自」型の複合動詞が不規則な複合動詞と対応するのは、V1が非意図的な行為を表す場合、つまりV1が非対格自動詞である場合に限られることが分かる。

## 6. おわりに

本稿では複合動詞の自・他対応について考察し、「他+非対格自」型と「非対格自+他」型の不規則な複合動詞の派生について論じた。日本語の語彙的複合動詞は「～上げる」「～上がる」のほかにも数多く存在し、本稿で見出した結論は決して一般化できるとはいいがたい。不規則な複合動詞については、語構成論的な立場から更なる考察を行い、その成立・不成立の理由についてもっと探るべきだと思われる。これらの点については今後の課題としたい。

### 参 考 文 献

- 石井正彦 (1983) 「現代語複合動詞の語構造分析における一観点」『日本語学』2(8), 明治書院, 79-90  
 ——— (1987) 「複合動詞の成立条件」『ケーススタディ日本文法』おうふう, 56-61
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房  
 ——— (1999) 『形態論と意味』くろしお出版
- 工藤力男 (2005) 「〈立ちあげる〉非文の説——複合動詞論・続——」『成城文芸』(成城大学文学部) 192, 14-36
- 国立国語研究所 (2000) 〈新「ことば」シリーズ 12〉『言葉に関する問答集』
- 斎藤倫明 (1989) 「語構成Ⅱ 派生語」, 森田良行他 (編) 『ケーススタディ日本語の語彙』桜楓社, 58-65
- 須賀一好 (1984) 「現代語における複合動詞の自・他の形式について」『静岡女子大学研究紀要』17, 静岡女子大学 1-13
- 西尾寅弥 (1982) 「自動詞と他動詞——対応するものとししないもの——」『日本語教育』47号, 日本語教育学会, 57-68
- 仁田義雄 (1982) 「再帰動詞, 再帰用法——Lexico—Syntax の姿勢から」『日本語教育』47, 79-90
- 松本 曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114, 日本言語学会, 37-83
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 山本清隆 (1984) 「複合動詞の格支配」『都大論究』21, 東京都立大学国語国文学会, 32-49
- 李 良林 (2002) 「語彙的複合動詞における構成要素の組み合わせ——再帰性に基づく他動性の観点から——」『言語科学論集』第6号, 13-24
- 検索エンジン:

<http://www.yomiuri.co.jp>, <http://asahi.com>, <http://www.goo.co.jp>, <http://www.aozora.gr.jp>